

書評

太刀川弘和著

『つながりからみた自殺予防』

(人文書院、2019年)

樋口 麻里

精神科医として自殺予防活動を行ってきた著者が、本書で取り組んでいる問いは、「個人に生じる自殺問題と社会の自殺現象の関連をどのように考え、どのように対策を考えていけばいいのだろうか」(37頁)である。前者の問いに対する答えは、個人の自殺も自殺率の急激な変動(社会の自殺現象)も、「他者とのつながり方」に障害を来すことで起こるということである(第2章)。後者の問いについては、まず現行の自殺対策が詳細に紹介される。次に、現状の対策をつながりという視点から見直すことで、自殺の危機に直面する人には他者とのつながり方を修正、再構築、場合によっては解消し、つながりに変化をもたらすような介入が必要であることが示される(3章～6章)。本書を通して、精神医学の専門家は社会学や社会心理学の視点について、社会学や社会心理学の専門家は精神医学の動向や臨床現場で起こっていること、市民の立場から自殺予防に関わる人は、支援者に求められる具体的な態度について学ぶことができる。

自殺研究分野における本書の貢献は、社会学理論と精神医学、脳科学研究をリンクさせた点だろう。著者は互いにサポートし合う互酬的な関係性をもっている人ほど、自殺念慮をもたないと指摘する(第2章)。この知見は、従来自殺抑制要因として指摘されてきたソーシャルキャピタルについて、「なぜ自殺を抑制するのか」という自殺のメカニズムの一端を明らかにしている。著者は、この知見を脳科学研究の先行研究の知見と照らし合わせることで、自殺を「様々な社会的問題によってつながりに障害を来した個人の中で、自己に関する脳機能の混乱が起こり、その結果生じる絶望、苦痛から逃れるために生物学的死を選択する行動」(60頁)と再定義した。本書の知見が広まることで、自殺と密接に関わる医療現場では精神的症状だけではなく、患者のつながりも視野に入れ

た治療や支援がデザインされるようになるのではないか。例えば、家族関係からうつ症状が起きている人に対して、薬を処方するだけで、患者を家族の元に戻しては根本的な解決にはならない。もし治療者がつながりの重要性を知っていれば、家族以外の生活の拠点を患者と一緒に考えるとといったことも、治療方針の中により積極的に組み込まれるだろう。

第7章と第8章では、つながりの質的側面であるつながり方について議論される。とくに興味深いのは、一般的信頼とつながりの組み合わせが自殺に影響するという著者の仮説(以下、一般的信頼仮説とする)である(8章)。自殺や自殺念慮、自殺観の規定要因に関する国内外の社会学研究では、婚姻状況や失業など、他者とのつながりの有無や程度がしばしば検証されるが⁽¹⁾、つながり方についてはまだ十分検証されていないだろう。そうした中で一般的信頼仮説は、つながりの質的側面の研究を拓ける可能性を秘めているといえる。著者の研究関心に引きつけていけば、今後の課題として国レベルの一般的信頼と自殺率の考察について、個人レベルでの検証が挙げられるかもしれない。

本書を出発点として、更なる実証研究や実践が積み重なっていくことが期待される。

注

- (1) 例えば平野(2013)は、日本における自殺を許容する意識である自殺観と社会的統合との関連について、コミュニティー規範メカニズムの視点から実証的分析を行っている。平野も述べているように、社会調査では自殺行動を測定することは難しい。しかし、本書の著者のような精神医学分野の研究者と、社会学の研究者が協働することで、自殺行動と社会的統合や一般的信頼仮説の研究モデルの探究が期待できるかもしれない。

参考文献

- 平野孝典, 2013, 「社会的統合が自殺観に与える影響」『フォーラム現代社会学』12: 43-55.